
Another Globe

にごり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another Globe

【NZコード】

N1025M

【作者名】

ヒーリ

【あらすじ】

ひょんなことから別世界に迷い込んでしまう中学生の3人。

別世界で仲間もでき、冒険を続けて強くなつていく3人とその仲間たち。

別世界とはいつたい何なのか？ ファンタジックな世界の謎を解いていく少年たちの物語。
楽しくご賞味頂ければ幸いです。

序章 カーネーションの庭園

紙のするる音だけが響いている静かな空間。現世、ルールを守るもののが少なくなつてきていた中で、ここだけは本当に静かだつた。正面カウンターに飾られた四、五メートルほどもある時計の秒針が一秒、一秒を刻んでいくのに、まるで時が止まつているようを感じる。ここは市立王紅図書館^{おうか}。蔵書されている本の冊数が、なんと二百万を超えている大規模な図書館だ。本の配置も独特なので、初めて来たものにとってここは迷路に匹敵するかもしれない。こういう現状からも、本の配置の改善を訴える声もあがつていてそうだ。それでもこの図書館に人が来るのは、人気の本を多く取りそろえているというのと、マイナーで探しにくい本を入れているというところからだろう。

この図書館、メインホールは机や椅子がずらりと並んでいて、学生の勉強場所にも使われる。もちろん座つて本を読みたい人のためにも利用されるが、各本棚の近くに広めのスペースがあり、そこにも椅子が設置されているため、たいていの人はそこを利用するか、もしくは立つて読んでいるため、メインホールの机や椅子の利用者はほとんどが学生だ。

「んええっと… オクトーバーって何月のことだっけ」

正面カウンターから見てメインホール右奥の机に、一列に座つて勉強道具を並べている中学生たちの一人が、隣のちょっと前髪の長めな学生に小声で訊いた。

「Octoberは十月のこと、だよ…」

やさしい口調で答える。

「セイちゃんの発音の仕方つて、ホンツト『日本人』つて感じよねくす、と笑いながら、逆隣の後ろ髪が腰辺りまで流れている女学生がそう言つた。

「つるつせーなー。英語は苦手なんだよ」

つんとした表情で口をとがらせて最初の学生が答える。

彼らの名は順に、円満聖一^{ホウジョウキヨヒト}、逢坂熙^{アイサカヒロキ}、「セイちゃん」というのは、「聖一」の「聖」を「セイ」と読み、ユリノが名づけたあだ名である。ちなみに「熙」は「ヒロひん」と呼ばれ、「由麗乃」はキヨヒトに「ゴリ」と呼ばれている。

彼らは後日学校で行われるテストの復習をしにここへきている。いつもはヒロキの家で復習を行っているのだが、今日はあいにくヒロキの家の都合が悪かつたためと、静かで復習もはかどるだろうといふことからここでやることになった。実際は、ヒロキの気に入っている場所という理由もあったのだが。

「あー、終わつたつ」

一時間後。キヨヒトが大きな伸びをしながら言った。静けさの中に彼の声は響き、視線が集まつた。あわてて体をすくめる。

ユリノが恥ずかしそうにひじで小突いた。

「悪い悪い」

頭をぽりぽりとかく。乱れている髪がさらに乱れる。

そんな中、ノートをぱたんと閉じたヒロキがおもむろに立ち上がる。

「…じゃあ、僕、本、探してくるから…。帰る？ 待ってる？」

「あ、あたし付き合つよ」

「あ、俺も」

続いて二人も立ち上がつた。

ヒロキは本が好きだ。特にファンタジーものがお気に入りで、よっここにも借りに来るが、テスト前にもかかわらず本を悠長に読んでいられるのも、彼の成績が九割以上関係するだろつ。

そう、つまりは、頭が良いのだ。学年トップとまでは行かないが、一般生徒の平均的な学力よりは大幅に高い。だから本を読んでいられるのだ。

ヒロキがその系統の本棚を見て回る中で、奇妙な本を発見した。
なんだろう、これ…？

紫色の本で、タイトルも著者名も書かれていない。開いてみても中は真っ白だった。

「どうしたの？」

本棚の横から顔を出したユリノが、本を不思議そうな顔つきで見ているヒロキに気づいた。

「あ……これ……」

彼女にその本を渡す。

「何コレ？ 何も書いてないじゃない？」

逆側の本棚に向かっていたキヨヒトも、二人の様子に気づいて振り返る。

「ん、どうした。……なんだこれ？」

ページを先に進めたり、戻つたりするが、白紙のままで何も変わらない。

「ノート……じゃねーよな、外見からして。バー」「……でも王紅のマーカもねーし」

もう一度ぱらぱらとページをめくる。最後のページまで開いたところで、何か書いてあるのに気がついた。

「ん？」

【Those who touch invite it to
the fantasy world here.】

「ゾーズ…フ…トウチ…？」

「ゾウズ、フー、タツチでしょ」

一人が発音のやり取りをしていくことなど気にせず、ヒロキはただその英文を見つめた。

「…………【ここに触れた方を幻想世界に招待します】？」

わずか五秒足らずで、訳してしまった。

「ヒ、ヒロ…ッ！ お前、相変わらずすげ…………幻想？」

ヒロキは書いてある言葉に心を奪われ、興味と好奇心でそのページに手を触れてみた。

一瞬、目が見開かれる。

思った瞬間、まぶたは閉ざされ 倒れた。

「え？ ちょ、ちょっと、ヒロりん！」

ゴリノの呼びかけには答えない。ただ息だけをして、まるで眠っているよう。

ゴリノがあせるなか、キヨヒトは冷や汗を頬につたわせながら、倒れた彼と同じ行為をしようと/or>していった。

「ちょっと、なにばかなことしようとしてるのよ！ そ、そこに書いてる」となんて嘘に決まってるでしょー 倒れたのも… や、そう、あつと館内が暑いから…」

「…でも…もし本当なら…」

言葉に詰まる。彼女は彼の手がその紙に触れる瞬間をただ見つめていた。

手に伝わる紙の質感。普通の印刷用紙のよくな

…………

「…………セイちゃん？」

何の反応もない。異変に気づいたゴリノはとつとキヨヒトの肩を揺らしていた。

倒れこむキヨヒト。先ほどからのこの騒ぎで館内はざわめき始めた。

「セイちゃんー セイちゃんー そんな…まさか…こんなこと

て」

今にも泣きそうな表情になって、顔を伏せてしまつ。たまたま近くにいた男性が、ゴリノに近づいて肩に手を伸ばしつつ「大丈夫？」と声をかけた。

その瞬間、何かを決心したように、ゴリノは顔を上げた。男性は驚いて手を引いたと同時に尻餅をついてしまつた。

「あ、す、すみません…っ！」

軽く謝るが、そっちには意識が行っていない。ただ、倒れこんだキヨヒトの間に挟まつた紫の本を引っ張り出すことに夢中だった。

本が目の前まで来たら、今度はその最後のページを強引に開く。多少ページが破けてしまつたが、この際どうでもいい。とにかく、コリノはそのページに手をついたのだ。

「だ、大丈夫、君…？」

男性が声を掛けるが、コリノが反応することはなかつた。

甘酸っぱいような香りが鼻腔を通り抜けた。
田を開けてみると、田の前には縁があつた。ビーナス、葉のようだ。

ゆつくつと立ち上がる。足元には黄土色。周りは赤やピンクと縁。カーネーション。

いつの間に外に出たのだろう。キヨヒトは少しおもひき思ひした。
田の前には大きな館がある。とするといつこには庭園といつたところだろうか。

色鮮やかなカーネーションたちが生き生きと咲いているところを見ていると、なんだか自然と心が穏やかになつて、自分の中に秘める悩みとかがどうでもよくなりそうだった。

眠っている間に誰かにここまで連れてこられたのだろうか、と思考したが、ヒロキが倒れてしまつてからの記憶がない。まさかあんな事態の中で眠ってしまったとも言つただろうか。

そして、

これは夢か？

その考えに至つたのである。

しかし、夢とはまた違つた不思議な感覚がここにはあつた。

人は、夢を見ると、それを夢だとは思わない。そして目が覚めたときに夢だつたと気づくのだ。もちろん、夢の中でこれを夢だと分かる人もいるだろう。しかし、キヨヒトは飽くまで夢を見ているときにそれを夢と思わない方の人間だった。

もしこれが夢ならば、現実のことはほとんど覚えていなはず。

しかし、しつかりはつきつと覚えている。そしてこれを夢ではないかと自覚しているのだ。

今までのキヨヒトの夢の見かたとは明らかに違っていた。
それならば、誰かにここに連れてこられたのか、ところどころになるが、それも違うだろう。

不思議と体が、いや、心も軽い。なんでもできそうな自由をとこうのが、感じられた。しかしこの感覚の正体が分からぬ。
そういうえば

紫色の本に書いてあつた文章を思い出す。

【ここに触れた方を幻想世界に招待します】

こんな非現実的なことが本当に起こったのだとしたら。
キヨヒトはとこかくあの館へ向かつてこじた。

時折少し強めの風が吹いてくるときには花の香りが漂うのがすゝく
気持ちがいい。

そんな桃色の匂いに包まれているなか、館の目の前まで着いた。
館はレンガでできていて、外壁をとじねじりが植物が覆つてい
る。レンガの汚れ具合や欠け具合から見ると、結構昔のものらしい。
どこかで見たことがあるような気がしたが、思い出せなかつたので、
記憶をたどるのをやめ、扉に手を伸ばした。

ぴたりと取つ手の寸前で止める。

館に勝手に入つてもいいものなのだろうか。そうためらつていた
のだ。

「セ、セイちゃん！」

後ろから聞き覚えのある声がした。振り返ると、庭園の奥のほう
からコリノが走つてこちらに向かつてきていた。
「セイちゃんもここにきてたんだ……」

コリノがすぐ田の前まで着てそつと立つた。それに彼はうなずいた。

「ああ、どこなんだ、ここ？」

「分かんない…。そういえば、ヒロりんは？」

ユリノが視界に現れる前から気にかけていたことだ。

「いや…見てない」

「そう…。あつ、この中にはいるかもしないね、入つてみよー。」

「あ、おい、ちょっと待」

キヨヒトが止めるのも聞かず、あつたとユリノは扉を開けてそくさと中に入つてしまつた。

ああもう、人の話聞けよな

彼女の後を追いかける。

中は広々とした廊下のところから部屋へ通じると思われる扉があり、途中には階段が見えた。

「すみません！ 誰かいませんか！」

キヨヒトが叫んでみるが、反応はない。留守なのだろうか。

「これだけ大きな館に使用人さんの一人もいないなんて考えられないと。もしかしたらここは廃墟なのかも。進んでみましょ」

「あ、おい、待てつて！」

また置いてけぼりにされてしまった。走つて進んでいくユリノは次々に扉を開けて回つていた。

小走りで追いかけ、ユリノの許へ着いた頃には既に扉は全て開かれていた。どの部屋も書斎のようなつくりで、本棚だらけだ。ただ、その中にも数部屋だけ更に廊下に続く道があつた。別館に続いているのだろうか。

そんなことを考えていると、木がきしむ音が聞こえてきた。

「なにしてるの、はやくつ！」

階段を上つていいくユリノの足音だった。いつの間にあそこまで上つたのか。

キヨヒトはあわてて追いかける。ユリノの表情はまるでヒロキを探すというよりも、冒險しているように見えた。

一階に着くと、一階と同様に片つ端から部屋といつ部屋を開けて回つた。

キヨヒトは着いていくのがやつとだつたのだが、ある声に足を石

のようにならせてた。「何を、しておるのかね?」「

人…いるじゃねーか…

まるで一昔前のロボットのように体を声がした方向に向けるキヨヒト。彼が追いかけてこないのに気づいて、コリノも足を止めて振り返った。

「あ…」

「あの…俺たち…」

どう説明すればいいのか分からなくて、先の言葉が出てこない。「友達を、探してあるのかね?」

「へ…?」

白いひげに覆われた老人が、いきなり的中した答えを言ったため、きょとんとしてしまう。

「あ、あの…なんで…」

「友達が待つておるよ。さ、ついてきなさい」

老人が誰なのかは分からなかつたが、とにかくこの館にヒロキがいることは間違ひなさうだった。

言われるがまま、何も反論せずにその老人の猫背になつた小さい背中についていく。

本当にここには変なところだつた。開けていく部屋部屋が本棚しかない。

「さ、ついたよ」

ヒロキがいるらしい扉を老人が開けると、その部屋もまた本棚で埋まっていた。

その中で、ヒロキがある本に夢中になつてている。

「あ…みんな」

「ヒロッ…」

「ヒロりん!」

すぐさま駆け寄る。ヒロキは読みかけていた本を閉じた。

「お前こんなところで何やってんだよ」

「「めん…。気づいたら…この人の、目の前にいたんだ…」

目線で老人を指す。

「いやあ、びっくりしたよ。こきなり何もないところから子供が現れるんだからなあ」

「どうも、すんません、勝手に入つてきて」

キヨヒトが頭を下げた。

「コイツが、俺が止めるのも聞かずによかずかと入つていくもんですから……」

そういうてユリノの頭に手をやつて無理やり押し下げた。

「ちょ、なによ、私のせい？ ヒロりん探してたんだし、このおじいさんも優しそうだし、いいじゃない。……ね、いいわよね、おじいさん。許して？」

やり取りを見ていた老人は、さも久しぶりに楽しそうなところを見たといわんばかりににこにこと笑い出した。

「いいわい、いいわい。そんな些細なこと気にせんて

「わあ、おじいさんありがとー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1025m/>

Another Globe

2010年10月20日22時43分発行